

## 第1章 概観（国土、民族、気候、社会、歴史等）

### 1. 正式国名

フィリピン共和国 (Republic of the Philippines)。フィリピンの国旗は青と赤のストライプ、白の三角形、太陽と3つの星から成り立つ。青は愛国心と正義、赤は自由と独立、白は平和を意味する。3つの星はフィリピンの主要な3地方（ルソン地方、ビサヤ地方、ミンダナオ地方）を表し、太陽が独立を、太陽から出る8つの光線はスペインからの独立運動で中心的役割を果たした8つの州を表している。



フィリピンの国旗

### 2. 人口

1億1,289万人<sup>1</sup>。地方毎の人口分布は、ルソン地方約57%、ビサヤ地方約18.9%、ミンダナオ地方24.1%である。マニラ首都圏に全人口の約11.9%が集中している。また、工業団地が集中するマニラ首都圏南方のカラバルソン地域には、マニラ首都圏の人口を若干上回る14.3%が居住する。

### 3. 国土

フィリピン共和国は、7,100余の島々からなる東南アジアの島嶼国家である。国土の西側は南シナ海、南側はセレベス海、東側はフィリピン海に面している。フィリピンの国土面積は日本の約80%にあたる約30万平米で、大きくはマニラ首都圏を含むルソン地方、ビサヤ地方（中心都市セブ）、ミンダナオ地方（中心都市ダバオ）という3つの地域に分けられる。

### 4. 首都

フィリピンの首都はマニラ首都圏（メトロマニラ）で、国語であるタガログ語では「マイニーラ」と発音される。「ニラッド」という植物のある町を意味する「マイニーラッド」が地名の由来である。

### 5. 気候

熱帯海洋性気候。雨期は6～11月、乾期は12～2月、最も暑くなる暑期が3～5月で12月～2月の朝夕は比較的涼しく過ごし易い。年間平均気温は27℃前後で、真夏には36～37℃に達する日も少なくない。

<sup>1</sup>（出所）国際連合公表資料（2023年）

図表 1-1 フィリピン（マニラ）の月平均最高/最低気温と月降水量（1991-2020 年平均）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
降水量 (mm)	19.4	21.9	21.8	23.4	159.1	253.3	432.3	476.1	396.4	220.6	119.9	98.5
最低気温 (°C)	23.9	24.3	25.3	26.7	27.0	26.5	25.9	25.9	25.7	25.7	25.3	24.6
最高気温 (°C)	29.9	30.7	32.1	33.8	33.6	32.8	31.5	31.0	31.2	31.4	31.3	30.3

(出所) 気象庁 HP

フィリピンでは、毎年多くの台風が通過し、その一部が上陸する。大型の台風は、毎年フィリピン各地で甚大な被害をもたらしている（図表 1-2）。2021 年 12 月に発生した *Odette* では、セブ島における被害も大きく、現地調査では、電柱が倒れインターネット回線が遮断されたことで、特に通信環境の確保が困難であったとのことだった。今後の対策として、いくつかの日系企業では、衛星携帯を配備しているようである。

図表 1-2 フィリピンにおける近年の主な台風とその被害状況

年月	台風名 (フィリピン名)	台風名 (国際名)	被害状況
2009 年 9 月	Ondoy	Ketsana	死者: 464 名 被害総額: 約 2.4 億ドル
2009 年 10 月	Pepeng	Parma	死者: 約 500 名 被害総額: 約 6 億ドル
2011 年 9 月	Pedring	Nesat	死者: 464 名 被害総額: 約 3.3 億ドル
2011 年 12 月	Sendong	Washi	死者: 1,268 名 被害総額: 約 4,700 万ドル
2012 年 12 月	Pablo	Bopha	死者: 1,146 名 被害総額: 約 10.4 億ドル
2013 年 11 月	Yolanda	Haiyan	死者: 6,201 名 被害総額: 約 9.4 億ドル
2014 年 7 月	Rammasun	Glenda	死者: 222 名 被害総額: 約 8.0 億ドル
2015 年 10 月	Koppu	Lando	死者: 62 名 被害総額: 約 3.1 億ドル
2018 年 9 月	Mangkhut	Ompong	死者: 134 名 被害総額: 約 3.8 億ドル
2021 年 12 月	Odette	Rai	死者: 375 名 被害総額: 約 7.9 億ドル

(出所) 国家災害調整委員会、国土交通省資料等から作成

## 6. 民族

フィリピンの民族は主にマレー系であり、そのほかに中国系、スペイン系、これらの混血と少数民族が存在する。

## 7. 言語

国語はフィリピン語（タガログ語を基礎とする）。公用語として広く英語が使われている。その他、セブ島のセブアノ語をはじめ、80前後の方言が使われている。

## 8. 宗教

カトリック教約80%、その他のキリスト教約10%、イスラム教約5%である。



カトリック教会の中

## 9. 教育

### (1) フィリピンの教育制度

フィリピンの義務教育は13年<sup>2</sup>である。初等教育への就学率は約92%<sup>3</sup>、15歳以上の識字率は約96%と高いレベルにある<sup>4</sup>。フィリピンの義務教育制度は、2013年5月に教育制度改革として、これまでの義務教育期間は10年間であったのが、13年間に伸長する法が施行されている。

従前は、初等教育（義務教育の小学校）6年、中等教育（中・高校）4年、高等教育（大学）4年であった。大学入学前の基礎教育が10年間は、日本の6-3-3制やそれと類似の制度を持つ国々に比べると10年間と短いため、教育の質が低くなることによる基礎学力の低さが問題点として指摘されていた。

これを他国並みにするために、前述の2013年度の教育制度改革で更に幼稚園1年を義務教育期間に編入し、中学校4年制の導入、高等学校4年を2年へ短縮された。すなわち、1(幼) - 6(小) - 4(中) - 2(高)制が導入され、義務教育期間が13年間となり、充実した教育を図っている。

<sup>2</sup> (出所) 外務省「諸外国・地域の学校情報」 フィリピン  
([http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/01asia/infoC11400.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC11400.html))

<sup>3</sup> (出所) 2022年 UNESCO 統計データ

<sup>4</sup> (出所) 2019年 UNESCO 統計データ

## (2) フィリピンの高等教育

フィリピンの高等教育（大学）進学率は約 35%<sup>5</sup>である。フィリピンの主要な大学としては、国立のフィリピン大学（University of the Philippines）が有名であり、マニラ首都圏ケソン市ディリマンキャンパスのほか、ラグナ州ロスバニョス、ルソン島北部のバギオ市、パナイ島イロイロ州のイロイロ市などのキャンパスがある。私立大学としては、アテネオ・デ・マニラ大学、デ・ラサール大学、サントトマス大学などが有名である。

次の図表に示すとおり、フィリピンの高等教育機関卒業生数は年間約 79 万人おり、そのうちの約 29%が経営/ビジネス関連学部、次いで約 21%が教育学部、工学部が約 11%となっている。以前は、看護師として海外で就労することによる高収入を目指して、医療関係を専攻する学生が多かったが、2019 年の卒業生では 6%程度となっている。

図表 1-3 フィリピンの高等教育機関卒業生数

学部/学科	AY2018-2019 年卒業	
	人数	構成比 (%)
経営/ビジネス関連	233,194	29%
教育	169,832	21%
工学系	87,083	11%
IT 関連	81,477	10%
医学及び医療関連	45,301	6%
社会/行動科学	26,240	3%
農林水産業	26,259	3%
サービス	17,690	2%
海事	16,871	2%
人文	9,397	1%
マスコミュニケーション	8,638	1%
自然科学	8,249	1%
建築、都市計画	5,697	1%
芸術	3,572	0%
法学	3,246	0%
数学	3,192	0%
その他	50,638	6%
合計	796,576	100%

（出所）高等教育委員会（CHED）データより作成。2023 年 12 月現在、2022 年度版は未発表

## 10. 通貨

フィリピンの通貨はペソ（PHP）で、2023 年 12 月末時点、1 ペソ=約 2.7 円である。なお、20 ペソ硬貨が新たに 2020 年より流通している。

<sup>5</sup> （出所）2021 年 UNESCO 統計データ

## 11. 歴史<sup>6</sup>

### (1) 先史時代

フィリピン人の先祖はマレー系の人々である。まず、2万5000年から3万年ほど前、ネグリト族がアジア南部からマレー半島を経てフィリピンに移住し始めたと言われる。その後、紀元前1万年～紀元前8000年頃から、新石器文化を伴った原始マレー人達が渡来し、紀元前1500年から紀元前800年頃には、農耕文化を持ったマレー人がフィリピンに定住し始めた。また、マレー系の人々の移住が始まった後の、比較的早い時期に中国人も渡来してきたと考えられる。

### (2) 10世紀 - ラグナ銅板碑文から分かること

フィリピンの歴史は、16世紀のマゼランの到着とその後のスペイン支配の時代から語られることが多いが、1990年に発見された「ラグナ銅文碑版」に記された内容は、スペイン人到来の6世紀前、10世紀頃のフィリピンにおいて、黄金による金銭取引や、法律による統治が行われていたことを窺わせるものである。フィリピンの考古学者アントン・ポストマの解説によると、ラグナ銅文碑版に記されていたのは、西暦900年頃、「ドゥンドゥアン（現在のマニラ市トンド地区と考えられる）の首長が、ある政府高官の黄金による負債を不問にすることの証明書のような内容で、証人の名前や管轄地区なども記されていたという。しかし、出自が不明確なことから、この「ラグナ銅文碑版」の真贋は未確定である。

### (3) 14世紀 - イスラム教の伝来

14世紀後半頃には、中東からインド、東南アジアを経て中国までを繋ぐ航路で海上交易を行っていたイスラム商人の影響を受け、フィリピン諸島にもイスラム教が広まり始めた。1450年頃には、フィリピンで最初のイスラム王国であるスールー王国が誕生し、マレー半島のマラッカ王国生まれのアラブ人、シャリフル・ハセム・シェド・アブ・バクルがスルタン（王）に就任した。フィリピンにおけるイスラム教は、スペイン人がやって来る頃までにその勢力をマニラ湾まで伸ばしていた。

### (4) 16世紀～19世紀 - スペイン占領時代

1521年、スペイン王の信任を得たポルトガル人航海者のフェルディナンド・マゼランが現フィリピン領ビサヤ諸島のサマル島に到着した。その後、同じくビサヤ地方のセブ島で、セブ王をキリスト教に改宗させ、その他のセブ島周辺の首長たちにもキリスト教への改宗とセブ王への服従を要求するが、セブのマクタン島のイスラム教の首長ラプラプが改宗や服従を拒否し、1521年4月、マゼラン軍はラプラプ軍との戦闘となった。この戦闘でマゼランが殺害され、マゼラン軍は破れた。

<sup>6</sup>（参考文献）鈴木 静夫著「物語 フィリピンの歴史」等

マゼランの次にフィリピンにやって来たルイ・ロペス・デ・ビリヤロボスは1543年、スペイン王フェリペ2世（当時は皇太子）の名に因み、現在のフィリピン諸島を「ラス・イスラス・フェリピナス（Las Islas Felipinas）」と名付けた。これがフィリピンという国名の由来である。

1565年、メキシコからセブに到着したミゲル・ロペス・デ・レガスピは、その後1571年にマニラをフィリピン諸島の首都と宣言し、マニラに現在も残る城壁都市イントラムロスの建設を指示した。レガスピは、スペイン植民地政府の初代マニラ総督に就任し、現地住民のローマンカトリックへの改宗とスペイン支配確立を進めた。

スペイン占領時代、フィリピンは、季節風を利用してマニラとメキシコのアカプルコとの間を船（ガレオン船）で往復して行われた交易、いわゆるガレオン貿易の拠点として栄えた。マニラ発のガレオン船は、現インドネシアとなる香料諸島の香辛料、中国・東南アジアの磁器、象牙、漆器、絹製品をアカプルコに運んだ。これらの品々は、アカプルコから更に陸送、海運を経て、最終的にはスペインまで届けられた。ガレオン貿易は、アジアからの品物を、当時オランダの制海権下にあった喜望峰を通らずにスペインに運ぶルートであった。アカプルコからの帰路は、マニラに銀が運ばれた。ガレオン貿易の進展に伴い、中国人、日本人のフィリピンへの移住や、南米から連行されてきた黒人などもマニラに住むようになった。特に、ガレオン貿易で活躍した主に福建省出身の中国人とフィリピン人との間での混血が進み、中国人はフィリピン社会に同化していった。

スペインは、現在のフィリピンの全域を支配下に治めることはできず、ミンダナオ島のイスラム教徒や、更に南のホロ島のスールー王国などは、スペイン統治時代300年以上にわたって抵抗を続けた。スペイン統治下のフィリピンは、フランス、イギリス、オランダ等からの攻撃を受けており、イギリスは1762年スペインに宣戦布告し、東インド会社の軍がマニラを攻撃、その後マニラは2年間だけイギリスの占領地となった歴史がある。

1565年に始まり、250年わたってスペイン人が独占的に行っていたガレオン貿易は1815年に廃止され、1834年にはマニラ港は正式に自由港として開港された。1809年、マニラに初めてイギリスの商館が設立された後、イギリスを中心に米国、フランス、スイス、ドイツなども次々とマニラに商館を設立した。自由港となったマニラからは、マニラ麻、砂糖、タバコなどの農産物の欧米への輸出が増大し、これらの商品作物を栽培するため、農場経営の大規模化や土地所有の集中が進んだ。少数の富豪による大土地所有制度はハシエンダと呼ばれ、農民が土地を持たない小作農化が進み、こうした社会構造は現代フィリピンの農地解放の遅れや貧困問題にまで影を落としている。

### (5) 19世紀末 - スペインからの独立と米国による支配

マニラが自由港となり、貿易自由化によって欧米との貿易が拡大すると、フィリピンでも高等教育が拡充し、海外から自由主義思想が入ってきた。やがてナショナリズムが高まり、学生や知識層を中心に、スペイン本国政府への改革要求を強め、民族運動の動きが高まっていった。特に、後にフィリピン独立の父として「国民的英雄」となるホセ・リサールが1887年にスペインで発表した『ノリ・メ・タンヘレ』（我に触るな）という小説は、スペインによる植民地支配の圧政で苦しむフィリピンの現状を描き、スペイン支配を厳しく告発し、その後の民族運動に大きな影響を与えた。リサールは1896年12月30日、スペイン政府により暴動の扇動容疑で銃殺刑となった。

スペインからの独立を求める革命勢力の中心人物エミリオ・アギナルドは1898年、米国とスペインの戦争（米西戦争）においてフィリピンの独立を口頭で保証した米国側を支援し、亡命先の香港から米国艦隊とともにフィリピンに帰国した。アギナルドは6月12日にスペインからの独立を宣言したが、同年12月にスペインと米国はパリ講和条約を締結、スペインはフィリピンを約2,000万ドルで米国に売却し、米国がフィリピンの統治権を手に入れた。フィリピンの独立を口頭で保証しながら文書化せず、主権を奪い取った米国の統治に反対するアギナルドは、米比戦争に突入、1899年1月23日にフィリピン共和国を樹立して初代大統領に就任したが、1901年米軍に捕らえられ米国の主権を認めざるを得なくなった。

米国支配時代には、スペイン統治時代に台頭した大土地所有者が一層強大さを増す一方、小作農や労働者達の貧困は解消されなかった。このため各地で農民や労働者による運動が激しさを増し、フィリピンにおける共産主義の拡大につながっていく。

米国からの独立を求める動きは続いたものの、1935年になってようやくマヌエル・ケソンが大統領に選ばれ、10年かけてフィリピンの米国からの独立を準備するコモンウェルス政府（米自治領政府）が発足した。しかし、その10年を経ずして太平洋戦争が勃発した。

#### (6) 1940年代前半 - 日本占領時代

日本軍は、1941年12月8日の真珠湾攻撃による日米開戦と同時にマニラにも侵攻、同月ダグラス・マッカーサーがマニラ湾のコレヒドール島に逃れ、1942年1月2日に日本軍がマニラを占領し、軍政を開始した。その後、4月にバタアン半島、5月にコレヒドール島の米比軍が日本軍に降伏、更に同月、米国極東陸軍（ユサフェ）の全軍が降伏を宣言した。

降伏後、米政府はフィリピン人による抗日ゲリラ部隊を組織して日本軍への抵抗を続け、当時のマヌエル・ケソン大統領は、米国のワシントンで亡命政府を建てた。バタアン半島での米比軍降伏後、日本軍が米比軍及び民間人の捕虜を収容所に移送する際、食料や水も不十分な中、疲弊した捕虜を、炎天下、長距離徒歩で移動させた結果多数の死亡者が出たことは、「バタアン死の行進」として広く知られている。バタアン陥落の4月9日は、「勇者の日」（Araw ng Kagitingan）として現在でもフィリピンの国民の休日となっている。

一方日本軍は、1943年10月14日に軍政を終了させ、親日派のホセ・ラウレルを大統領とするフィリピンの独立を認めたものの、実質的には軍政下と変わりなかった。1944年に入ると戦局は米軍優勢となり、10月にはマッカーサー率いる米軍がレイテ島に上陸。マッカーサーとともに帰国したセルジオ・オスマニャ大統領がレイテ島タクロバンにコモンウェルス政府を再開させた。1945年3月、マニラ市街戦を制した米軍がマニラを制圧、8月15日に終戦を迎える。フィリピンでは、52万人近くの日本人が戦没<sup>7</sup>している。

<sup>7</sup>（出所）厚生労働省

## (7) 独立後のフィリピン、マルコス政権、戒厳令からエドサ革命まで

終戦の翌年、1946年7月4日、フィリピンはマヌエル・ロハス大統領が就任し、米国からの独立を宣言してフィリピン共和国が誕生したが、その後も米国の影響を強く受け続けた。1965年に就任したマルコス大統領は、経済政策などの実績が認められ1969年に再選された。マルコス政権は、1972年に戒厳令を布告、強権的な独裁政治で20年間にわたってフィリピン大統領としての権力を握ったが、1986年、マルコスの政敵ベニグノ・アキノ元上院議員の暗殺や、大統領選挙での不正を機に起こった独裁支配に反対する民衆蜂起による「エドサ革命」で失脚し、ハワイに亡命した。

## (8) マルコス後、第2のエドサ革命とそれ以降のフィリピン

マルコスの失脚後、フィリピンは暗殺されたベニグノ・アキノ元上院議員の夫人、コラソン・アキノ大統領が国家元首となるが、アキノ大統領在任中は国軍によるクーデター未遂事件が7回も起こり、バギオの大地震やピナツボ火山の爆発による大きな被害に見舞われ、それらがきっかけで駐比米軍の撤退が決定したほか、農地改革も進まず厳しい時代であった。

1992年に就任した軍人出身のフィデル・ラモス大統領は、規制緩和を推進し、電力供給の安定化や比較的高い経済成長率の達成等、一定の成果を上げた。多くの日本企業がフィリピンに製造拠点を作り始めたのもラモス政権期である。

ラモス大統領の任期満了後、1998年の大統領選挙では大学中退、人気俳優出身のジョセフ・エストラーダ大統領が誕生したが、不正蓄財疑惑によって2000年11月に弾劾動議が成立し、失脚した。当時副大統領だったグロリア・マカパガル・アロヨが大統領に昇格し、フィリピンで2人目の女性大統領となった。アロヨ大統領は2004年の選挙で再選され、2010年まで10年間大統領の座にあった。アロヨ政権期間中の2006年には日比二国間での経済連携協定（JPEPA）が締結されている。また、アロヨ大統領の任期中、フィリピンはIT/BPOのオフショア拠点として世界中から認知が高まり、40万人を超える雇用と売上70億ドルの産業に急成長した。

2010年5月の大統領選挙では、故コラソン・アキノ大統領の息子であるベニグノ・アキノ3世（通称ノイノイ）が勝利し、第15代大統領に就任した。アキノ大統領は、治安の改善や汚職の撲滅のほか、インフラの整備や競争法の制定といった経済政策を積極的に推進し、外資企業より投資先として見直されるようになり、対内直接投資額を大幅に増加させることとなった。同大統領の任期であった2010年～2015年の6年間で年平均6%程度の堅調な経済成長を遂げた。

2016年5月の大統領選では、ダバオ市長であったロドリゴ・ドゥテルテ氏が治安の改善、特に麻薬の撲滅を最も重要な政策と掲げて勝利し、第16代大統領に就任した。ドゥテルテ氏は、任期を終えるまで高支持率を得ていた一方で、米国に対する強硬的な言動や、「麻薬撲滅戦争」により国際的な非難を浴びていた。特に、ドゥテルテ氏による「麻薬撲滅戦争」において、過激な取り締まりの過程で6,000人を超える麻薬犯罪容疑者が殺害されたと報道されている。警察によるこの超法規的な取り締まりは、人権問題としてフィリピン国内外で批判された一方で、治安改善には繋がったと評価されている。現地調査ではいくつかの日系企業が、ドゥテルテ氏就任後、空港などの軽犯罪などが減り治安が改善されたことを実感していた。



### (9) マルコス新政権の発足

2022年5月の大統領選挙では、前出のマルコス元大統領の長男であるフェルディナンド・マルコス・ジュニア氏が、史上最多得票率（55.8%）で圧勝し、第17代大統領に就任した。大統領選挙では、前政権の与党であるPDP ラバンによる支援を受けたことも追い風となったとされている。なお、同時に実施された副大統領選では、ドゥテルテ前大統領の娘であるサラ・ドゥテルテ氏が出馬し、2位の候補者と大差をつけて当選した。マルコス政権では、「フィリピン開発計画 2023 - 2028 (PDP)」の策定により、経済発展と貧困削減に取り組んでいる。この開発のシナリオは、ドゥテルテ前政権の取り組みを引き継ぐかたちとなっており、教育や保健、司法など多岐にわたっているが、主にマクロ経済の安定やインフラ整備などによって投資環境を改善し、投資と雇用の拡大を図る計画とされている。年率 6.5~8%の成長を通じ、2024年までの上位中所得国入りを目指している。2023年7月の就任後二回目となる施政方針演説では、前政権から引き継いだインフラ計画を推進するべく、鉄道開発などの大型インフラの計画を延期せず官民連携で事業を活性化させる方針を示した。さらに、エネルギー分野では、再生可能・低炭素エネルギー比率を2040年までに50%にするなど、気候変動施策にも言及した一方で、電力の安定供給のため原子力発電所の建設を再検討する必要があると述べた。

外交面では、ドゥテルテ政権時の中国やロシアに偏った対外政策からシフトし、マルコス政権はアメリカへの外交を行うなど全方位外交を目指している。「独立した対外政策」を追求するために、適度な距離感を推進する方針である。また、南部ミンダナオ島では、マルコス政権のもと、2025年6月のバンサモロ自治政府樹立に向けた移行プロセスが進展している。

図表 1-4 フィリピンの歴史

年月	主な出来事
約3万年～ 2万5000年前	ネグリト民族がフィリピン諸島に移住。
紀元前1万～ 紀元前8000年頃	フィリピン諸島に新石器文化を持った原始マレー人が定住し始める。
紀元前1500年～ 紀元前800年	農耕文化を持った古マレー人が定住し始める。
10世紀	現在のブラカン地区に、法律による支配が行き届いた成熟した社会が形成されていたらしい <sup>8</sup> 。
982年	フィリピン諸島が「モ・イ」という地名で中国の史書「文献通考」に登場する。
14～15世紀	スールー諸島にイスラム教が伝わり、フィリピンで初のイスラム王国であるスールー王国が誕生。
1521年	マゼラン一行がビサヤ地方サマル島に到着。 同年、マゼランは現セブ州マクタン島の首長ラブラブ軍との戦闘で殺される。
1543年	スペイン皇太子フェリペ2世の名にちなみ、現フィリピンが「イスラス・フィリピナス」（フィリピナス諸島）と命名された。
1565年	スペインとのガレオン貿易が始まる（1815年まで続く）。
1571年	マニラを首都とし、スペインによる植民地支配が始まる。
1614年	キリスト教を信仰し、日本を追放されたキリシタン大名高山右近がマニラに到着。 翌年2月にマニラで死去。

<sup>8</sup> 1990年に発見された「ラグナ銅板碑文」に記されていた内容（西暦900年の裁判記録のようなもの）から推察される。

年月	主な出来事
1762年	マニラがイギリスに占領される（1763年にパリ条約が結ばれ、1764年に再度スペイン統治に戻る）。
1834年	マニラが自由港として開港される。
1896年	フィリピンのスペインからの独立運動の指導者とされ、今日でも「国民的英雄」と称えられるホセ・リサルが、暴動を扇動したという容疑で銃殺刑となる。
1898年	米西戦争。6月12日、アギナルド将軍がカビテ州カウイトで独立を宣言。12月10日、米西パリ講和条約調印。スペインは米国にフィリピンを2,000万ドルで売却。米国によるフィリピン統治が始まる。
1935年	独立準備政府（コモンウェルス）発足。
1942年	1月、日本軍がマニラを占領。軍政開始。 4月、パタアン半島陥落。
1946年	7月4日、米国から独立し、フィリピン共和国となる。 ロハス大統領就任。
1956年	日比賠償協定調印。日比の国交回復。
1965年	マルコス大統領就任。
1966年	アジア開発銀行（ADB）本部がマニラに設置される。
1972年	マルコス大統領が戒厳令布告。 ベニグノ・アキノ上院議員ほかの活動家らを一斉に逮捕。
1981年	戒厳令を解除。マルコス大統領三選。
1983年	8月、ベニグノ・アキノ元上院議員暗殺事件。
1985年	12月、上記暗殺事件の容疑者26名全員に無罪判決。
1986年	2月革命（ピープル・パワー、エドサ革命ともいう）によりマルコス大統領失脚。 コラソン・アキノ大統領就任。マルコス大統領はハワイに亡命。
1987年	新憲法（現行）制定。
1991年	ピナツボ火山爆発。
1992年	フィリピン国内の米軍基地が全て撤退。 ラモス大統領就任。
1998年	エストラダ大統領就任。
2000年	エストラダ大統領、不正蓄財疑惑に端を発した弾劾裁判と、第2のエドサ革命（ピープルパワー2）により任期途中で失脚。アロヨ副大統領が大統領に就任。
2006年	日本との間で2国間の経済連携協定（JPEPA）締結。
2009年	コラソン・アキノ元大統領死去。
2010年	ベニグノ・アキノ3世大統領就任。
2012年	アキノ政権、ミンダナオのモロ・イスラム解放戦線（MILF）と2016年の自治政府設立に向けた枠組みで合意。
2015年	1月ミンダナオ島のマギダナオ州ママサパノ町において、フィリピン国家警察特殊部隊とモロ・イスラム解放戦線（MILF）との大規模な衝突が発生し、双方に多数の死傷者が出た。
2016年	ロドリゴ・ドゥテルテ大統領就任。
2019年	バンサモロ暫定自治政府が発足。
2022年	フェルディナンド・マルコス・ジュニア大統領就任。

（出所）鈴木静夫著「物語 フィリピンの歴史」（中公新書）、及びフィリピン観光省によるフィリピン基本情報等より作成

### ひとくちメモ 1： フィリピーノ（フィリピン人）の特徴的な気質

国により文化、価値観、ステレオタイプは異なり、フィリピンもそれは例外ではない。様々な国の植民地であった歴史により、様々な価値観が融合した独特な文化が醸成されている。

#### 1) 家族の絆を重んじる

フィリピン人は家族を非常に大事にする。多くの西洋諸国や現代の日本とは対照的に、フィリピン人の多くが祖父母、両親、孫と何世代にもわたる大家族で生活し、皆で食卓を囲むことの優先順位は高い。フィリピンでは働くシングルマザーが多いが、祖父母など家族の支えが強固であることから、子供を預けて仕事ができると言われている。

#### 2) 信仰（宗教）の存在感

大衆的な文化が広がり世俗化している現状にも拘わらず、人口の8割以上がキリスト教を信仰しており、その信仰心の篤さはメディア、ときには政治に影響を与えている。

#### 3) フィリピン人の貯蓄事情

楽観的な性格のためか、お金が入った分だけ使ってしまうため、貯蓄ができないフィリピン人が多い。一か月の間に金欠になってしまうため、フィリピンの給料日は月に2回とされている。それでも一度の給料日で全て下ろしてしまうことから、給料日のATMは長蛇の列になるそう。

#### 4) よく見られる習慣やエチケット

- ・ 公の場で人の間違いを訂正することは一般的に良いこととされない。
- ・ 多くの人は、全てがスムーズに進むよう取り計らうことを重要視する。
- ・ フィリピン人は性別に関係なく肉親や友人と腕を組むことや、手をつないで歩くことをする。
- ・ 唇の方向でものを指し示すなど、ジェスチャーを多用する。友人を歓迎する意図を示すために眉毛を吊り上げることや、長い時間眉毛を吊り上げると質問を意味する。
- ・ 歌と踊りが好きで上手な人が多く、想像しない場所で突然歌声が響きはじめることがある。
- ・ 友人宅での食事に誘われた際は一度固辞する。それでも誘われた場合は、好意に甘えて良い。

#### 5) お祭り（Fiesta）

人生を楽しむことを良しとする国民性のため、1年を通して全国各地で様々な祭りが開かれる。例えば、職場のクリスマスパーティーやアウトイング（遠足）にも気合が入るようである。

#### 6) スナックタイム（Merienda）

フィリピンにはスペイン統治時代からの伝統で、「メリエンダ」と呼ばれるおやつタイムが午前と午後にある。主にスナック菓子が好まれるようで、家だけでなく学校や職場でもおやつタイムが導入されていることがある。

### ひとくちメモ 2： フィリピンにおける食事

フィリピン料理は濃い味付けが多く、油を使い調理されることが多いため、カロリーコントロールが難しい。肉類は豚、鶏、牛の順番で好まれており、シシグと呼ばれる豚肉の細切れ料理はビールのおつまみとして定番料理となっている。砂糖、しょうゆ、塩、オイスターソースなどを使った甘くこってりとした味付けが多いが、酸味のある味付けも好まれている。シニガンと呼ばれるフィリピンの伝統的なスープはさっぱりとした味付けで、多くの野菜を摂取することができる。スーパーの野菜は鮮度や状態があまり良くない場合があり、野菜を摂取しづらいと言われている。

フィリピンの主食は白米であり、インディカ米が一般的である。濃い味付けの料理が多いためか、少ないおかずでも、たくさんのお米を食べ、一人あたりの米の消費量は日本の約2~3倍と言われている。フィリピン国内の外資のファーストフードチェーンでは、日本では見られないライスセットのメニューも導入されている。フィリピンでは、人口が増えたことで米の生産が不足しており、また様々な理由で水稲栽培が進んでいないために、他国からの輸入に頼っているという現状である。

マニラ首都圏（メトロマニラ）のビジネス街であるマカティやBGC（ボニファシオグローバルシティ）のレストランでランチすると、物価高や円安の影響もあり、日本円で1,000円を超すことがある。そのため、中心街の金銭感覚は東京と同様と考えておくのが良いだろう。



フィリピン料理（左がシシグ）